

NPO 純正律音楽研究会会報 ～2011年7月発行～

ひびきジャーナル



〒106-0031 東京都港区西麻布 2-9-2 Tel:03-3407-3726

Fax:03-3797-5640 e-mail:puremusic0804@yahoo.co.jp

No.29

発行日 平成23年7月25日

発行責任者 玉木宏樹

編集 NPO 法人 純正律音楽研究会
玉木宏樹・相坂政夫



当会代表の玉木宏樹は、昨年の夏の熱中症から体調を崩し、ようやく回復に向かっていたところ今年6月の猛暑で、ダウン、雑誌「ストリング」の連載も6.7月お休みしました。この会報 No.29 もお休みです。もう少し休養してからの活動になると思います。さて、9月19日月曜日(祝日)にサントリーホール・ブルーローズで「音楽で伝える大和の心」のコンサートが開催されます。出演は、お箏の吉原佐知子さんと玉木宏樹です。当会の主催ではございませんが、純正律音楽の大ファンであります小林愛子様(愛と華の会代表)の主催です。また、10月15日土曜日「都電貸切り純正律音楽コンサート」11月26日「ハープとヴァイオリンの純正律音楽コンサート」12月23日(祝日)には恒例の「都電貸切りクリスマスコンサート」を予定しています。ご予約等、詳細は巻末にございます「今後のスケジュール」にてご確認下さい。

ムッシュ黒木の純正律講座 第 29 時限目

平均律普及の思想的背景について(18)

純正律音楽研究会理事 黒木朋興

19 世紀末に排除され歴史的遺物として葬り去られたレトリックに再び焦点を当て現代におけるレトリック研究の礎を作ったのが 1970 年にジェラルド・ジュネットが発表した論文『限定されたレトリック』であると言われる。しかしこの論文はレトリックの歴史を曲解し、レトリックを復権するどころか逆に抑圧するものでしかなかった。

もともとレトリックには 1 : Inventio (発想)、2 : ディスポジティオ Dispositio (配置)、3 : エロクティオ Elocutio (修辞)、4 : メモリア Memoria (記憶)、5 : アクティオ Actio (発表) の 5 つの部門があった。ジュネットが描いてみせた歴史によれば、レトリックは 18 世紀にこの 5 部門のうち 3 の エロクティオ Elocutio (修辞) に限定され、更に 19 世紀を通し縮小され、とうとう 19 世紀末に廃止される、ということになる。ジュネットはその証拠として、18 世紀のデュマルセや 19 世紀初頭のフォンタニエの書いた教科書を挙げる。

しかしこの歴史はまったくの出鱈目だったのである。それを実証したのが現在のレトリック研究の大家であるフランソワーズ・ドゥエなのだ。確かに、デュマルセやフォンタニエの著作にレトリックをエロクティオ Elocutio (修辞) に、そしてその中でも特に転義法に限定しようという傾向があったことは事実である。ところがこれらの教科書は当時においてはレトリックの教科書ではなかったのである。現在の教養課程にあたるコレッジに入った若者達はまず一年目で「文法」を、二年目で「詩学」を学んだ後、三年目の最終学級で「レトリック」を修めることになっていたのだが、彼らの教科書は決してこの三年目のクラスで用いられることはなかった。デュマルセ自身は『百科全書』において「レトリック」の項目ではなく「文法」の項目を執筆していることから分かるように自らを文法家と認じていたのである。そしてデュマルセの著作もフォンタニエの著作も、実際には「レトリック」ではなく「詩学」の授業で教科書として使われていたのだ。更にフランソワーズ・ドゥエは、ジュネットが論文を発表した同じ 1970 年に当時のレトリックの授業で実際に使われていたピエロ＝デセイニ (1820-22) の『フランス雄弁講義』、ル・クレルクの『新レ

トリック』や18世紀の教科書の再版であるアベ・ジラルの『レトリックの規則』（1787、第8版1824）、そして『百科全書』で「レトリック」の項を執筆したアベ・マレの『雄弁家の朗唱のための規則』（1753、1872年まで版を重ねる）などを調べ上げ、レトリックがエロクティオ Elocutio（修辞）そして「転義法」に限定された事実は19世紀末に到るまで一切なく、18世紀がレトリックにとって転換点であるという事実は一切なかったことを証明した。レトリックのプログラムは16世紀に古代世界を参考に創始されて以降19世紀を通して5部門全体が受け継がれ、19世紀末になって突然終焉を迎えるというのが正しい歴史なのである。

ところでこのフランソワーズ・ドゥエの論文『異議あり、18世紀フランスのレトリックは転義法に「限定」されてはいない』は執筆されたのは1970年だが、学術誌に発表されたのは執筆から20年後の1990年のことであったのである。文字通り圧殺されたわけだ。何故かと言えば、当時既に権威であったジェラルド・ジュネットの間違いを指摘する論文を隠しておきたかったという意図が働いたのはもちろんのことだが、と同時に多くの文学研究者にとって、フランソワーズ・ドゥエの目指したレトリック研究自体が極めて不都合なものだったということではないだろうか？

**連続エッセイ【外科医のうたた寝】第26話
『南魚沼グルメマラソン』**

純正律音楽研究会理事

福田六花（シンガー・ランニング・ドクター）

僕はこの20年間を、医者を生業として、たまに音楽の仕事をして、趣味でランニングと云うスタンスで生活してきた。ところがここ4～5年バランスが変化してきて、ランニングに関わる仕事が少しずつやってくるようになった。ランニング雑誌に連載をしたり、マラソン大会にゲストで呼ばれたりする他に、マラソン大会のプロデュースをいくつかやらせてもらっている。

昨年、新潟県の南魚沼市からレース・プロデュースの依頼がやってきた。そ

の土地の風土、景色、気候などの特色を考え、閃いたのが「南魚沼グルメマラソン」と云うハーフマラソンの大会である。日本一の米どころである南魚沼には、どこまでも続く広大な水田が広がっている。八海山と魚野川、そして広大な水田を見渡す美しいコースを走り、走ったあとは絶品のコシヒカリをたっぷり食べて頂く。南魚沼はコシヒカリ以外にも様々な美味しい食材（もち豚、地鶏、野菜、山菜、キノコ、岩魚、鮎など）の産地でもある。会場には30店のオカズ屋台が並び、200～300円程度の金額でメシのオカズを買ってもらう。また八海山を始めとした日本酒の蔵元もたくさんあり、お酒も楽しんでもらう。

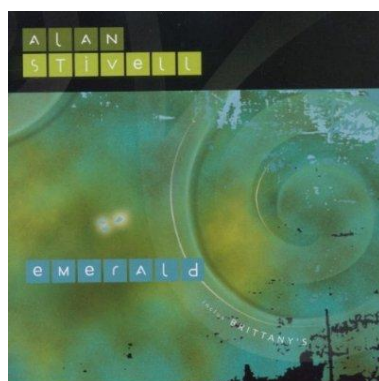
6月12日に「第2回 南魚沼グルメマラソン」が開催された。全国から集まった2500名のランナーと一緒に、走って食べて、コンサートやトークショーも開催した。会場の公園は満腹で寛ぐランナー、ほろ酔いでうたた寝するランナーでいっぱいになってしまった（狙い通りである）。マラソン大会だかフード・フェスティバルだかわからないようなイベントであるが、心の底から楽しんでもらえるマラソン大会の純正律を目指して、ひたすら試行錯誤する毎日である。



CD レビュー—純正茶寮

【 Alan Stivell, 『Emerald』】

純正律音楽研究会理事 黒木朋興



レーベル: Politur

ASIN: B004H3L88E

このところブルターニュの音楽を続けて紹介している。毎夏、彼の地を訪れフェスティヴァルでいろいろなバンドの演奏を聴いているというのものもある。何より、彼らは友人でありその音楽を日本に紹介するのに一役を買っているからというのがその理由だ。

というわけで、今回は一番の大物の新譜を紹介させて頂く。 Alan Stivell はブルターニュが産んだ彼の地を代表するミュージシャンであり、フランスだけでなくヨーロッパ中に知られているケルトハープ弾きである。もちろん私は個人的に面識はない。

エレキベース、フォークギターやエレキギターが入るロック風のアレンジなので、当然伴奏は純正律とは言えない。それでもバグパイプのメロディは明らかに平均律ではないし、要所要所で男性ヴォーカルは心地よいハモリを聞かせてくれる。

彼が活動を開始したのは1972年のこと、まさにこの時期に始まったブルターニュ文化復活運動の重要な一翼を担ったということになる。ブルターニュの地は中央から長年差別されて来た。「理性」を誇るフランスの中央文化に対し、隠すべきものという側面があったのである。特に、ブルターニュが世界第二次大戦の時にナチスドイツに協力してしまったのが決定的であった。ブルターニュ文化を誇る者は、対ナチ協力者と見られかねない、という状況が続いたので

ある。その中で、政治的な軋轢は脇に置いておいて、とりあえず伝統文化だけは大切にしていこうじゃないか、という気運が高まり70年代初頭よりブルターニュ文化復活の運動が始まる。例えば、ロストルナンという街での Festival Fisel が開始されたのも1972年のことであった。まさにフランスのブルターニュ音楽の興隆は Alan Stivell から始まったと言えるのだ。

「Musica おおた」の音楽よもやまばなし

♪手作り楽器教室♪

純正律音楽研究会 正会員
音楽事務所 Musica おおた
廣川 深

私は本年4月から児童指導員として、学童保育に携わっています。この歳になって、いままでの経験を生かすことのできる分野で活躍できる機会を得たことは、大変ありがたいことです。ところで私は音楽のほかには科学分野が大好きです。子供のころは、音楽少年であったことはもちろんですが、いわゆる科学少年でもありました。それに加えて工作、ものづくりも大好きでした。中学の頃は真空管のラジオ（5球スーパーなど、今の若い人は見たこともないでしょうね）を自作して楽しんだものです。高校2年の頃まで音楽系に進むか、理数系にするか考えていたくらいです。そのようなわけで、音楽教育を専門とするいまでも、音楽と深い関係にある音響工学、そして電子・電気工学をはじめ自然科学、生物学などの科学分野については、自分的には本業と同じくらいの意識レベルをもって臨んでいます。

そんな私が夏休みの工作教室と科学教室を担当することになりました。どうせやるなら私らしいものをやりたいところです。そこで楽器作りを思いつきました。様々なものが考えられますが、材料費がかからず、低学年の児童でもわりと手軽にできて、しかも楽器として実用性のあるもの、となると紙の笛が一番手頃なところです。材料は工作用紙とストローだけです。作り方は簡単。息

が当たるところに1センチメートル四方の四角い穴をあけた工作用紙を直径2.5センチメートルほどの筒状に丸め、両面テープでとめたあと、補強と空気漏れを防ぐためにセロハンテープで固定します。そして穴のふちに息があたるようにストローをテープで取り付けて完成。と、ここで私のこだわりがでました。せっかく楽器として作るのだから音律にこだわりたい。そして作った楽器で合奏をしたい。この2点です。音律については純正律の振動数比に基づいて、チューナーで確認しながら試行錯誤の末、次のように笛の長さを決定しました。

音階	振動数比	笛の長さ (mm)
ド	1	220.0
レ	8 : 9	195.6
ミ	4 : 5	176.0
ファ	3 : 4	165.0
ソ	2 : 3	146.7
ラ	3 : 5	132.0
シ	8 : 15	117.3
ド	1 : 2	110.0

上記音階のドは実音でGになります。したがってG-durの音階になりますので、移調楽器（G管）です。レがA=442Hzにほぼ一致していますので、他の楽器との合奏も可能です。ただ紙ですから、息で湿ってしまうと音が出にくくなってしまいます。またこの表よりも低い音はこのレベルの工作では無理なようです。この笛、意外と美しい音が出ます。なぜこのような音が出るのかを考えさせるのも音楽の科学ですね。なお、製作にあたっては、必ずしも8音作る必要はありません。特に低学年児童の場合は、ドレミの3音を作る人、ファソラの3音を作る人というように分けてもよいし、各自が単音の笛を持ち、合奏するのも楽しいと思います。

今回は、子供にも作れる手作り弦楽器を考えてみたいと思っています。また、楽器以外にもいろいろと工作のネタを考えていますので機会がありましたらお伝えしようと思います。

【純正律音楽と寺垣スピーカー】

純正律音楽研究会 正会員
(株) ABSネットワーク
会長 林 盛良

純正律音楽との出会い

私が純正律音楽のことを知ったのは1年半ほど前のことである。音楽理論に嗜みがない私だけでなく、残念ながら長年音楽に携わってきた者でも純正律を知っている人は稀のようだ。きっかけは私の会社が取り扱っている「寺垣スピーカー」から始まった。純正律音楽研究会のある理事がこのスピーカーを所有していることをネットで偶然知ったからだ。すぐに当会のサイトにアクセスし調べたところ「透明感の溢れる、シンプルなメロディとハーモニー」「ヒーリング効果があり、純正律こそ『音の自然食』」とある。サイトで平均律と純正律の聴き比べをすると、やはり純正律は心地よく、心が和み心に素直に届く、自然なハーモニーだと確信するに至った。

純正律音楽の響きは自然現象そのもので、人間の身体にもっともよく共鳴する音であるようだ。これは、まさに自然音を標榜する「寺垣スピーカー」の特長と驚くほど符号している。きっと「音の自然食」である純正律音楽を「音の自然色」を奏でる寺垣スピーカーで聴けばさぞかし最高なのではないか、と想像を膨らませていた。当会の理事が寺垣スピーカーを愛用されているのは至極当然だと合点がいった。

数ヵ月後、私が毎回参加している異業種交流会が催され、純正律音楽研究会から事務局の方が参加されていることがわかった。私の方から面談を申し入れたことは言うまでもない。この事務局の方とは共通の「知人」である純正律音楽の理事の話と寺垣スピーカーの話題で盛り上がり再会を約して別れる。その後、すぐに会員となり、やがて事務局の方としばしばお会いするようになった。今では、純正律音楽の広報宣伝を行ったり、販促用として純正律音楽CD

を大量に購入するなど会社を挙げて純正律音楽の普及活動を行っている。たとえば、寺垣スピーカー購入者には純正律音楽CDを特典として付けているのも、純正律音楽を寺垣スピーカーで聴いて、珠玉の響きを是非ご体験いただきたいからだ。

自然を奏でる画期的で「樂器的」な寺垣スピーカー

寺垣スピーカーは自然現象・物理現象を応用した発音方式の「自然を慈しみ、自然に自然な音色を奏でる」樂器的なスピーカーだ。中学2年の時、「少年エジソン」と新聞に報道され、これまで、すしロボット、寺垣プレーヤーなど数々の発明品を世に送り出してきた技術者、寺垣武氏が音源に忠実に再生することを目標に従来と違った方法で音を発生させるように開発した究極のスピーカーといえる。波動スピーカー、物質波スピーカーとも呼ばれることがある無指向性の寺垣スピーカーでは、耳に優しい自然な音が全方向に広がり、音の立ち上がりや粒立ちが明瞭で、どこに居ても同じように聴こえるのも特長である。

著名AV（音響・映像）評論家の林正儀氏も現在全国書店で発売中のオーディオ専門誌「analog（アナログ）」夏号（音元出版）で「寺垣スピーカーは楽器とみた方が付き合うのによさそうである。」「定位が動かない、抜群の安定度。普通のスピーカーではありえない現象。音質もすんなり心に入ってくる、ナチュラルそのもの。聴き疲れしない」「生のような鮮度と生き生きした音楽表現は何ものにもかえがたい。あなたもぜひ聴くべきだ」と絶賛され、力強い試聴評を寄せていただいた。また、同封のフライヤーと同内容で、上記専門誌の他、現在全国書店で発売中の特選街「大人のオーディオ百科」でも掲載されているので、機会があればご確認いただきたい。

寺垣スピーカーと動物の反応

ここに登場するモデル、ネコとウサギ(ネザーランドドワーフ)は、どちらもわが家の大切な息子と娘（ペット）である。ウサギは血統書付きだが、ネコは4年近く前、瀕死の重傷を負い冷たい雨に打たれていて、放置すれば命がなかった野良猫出身。「元気になるまでだよ」と言って連れ返ったノラが、すぐに手術

・入院。その後1カ月ほど通院した後元気を取り戻した。だが、わが家ではウサギがいることなど猫を飼えない多くの事情があった。苦渋の選択を迫られたが、結局どうしても手放すわけには行かなかった。



特にわが家のネコは妻や娘たちが奏でるピアノやヴァイオリン、ヴィオラの生演奏と寺垣スピーカーから流れる音楽が大好きだ。ある時手に入れた、子猫や鳥の鳴き声が入ったCDを流したところ、寝ていたネコは急に飛び起きてきてスピーカーに向かって突進。「ニャー ニャー」と鳴きながらスピーカーの周りを嗅ぎまわり激しく興奮、その後とても当惑した様子だった。一緒に暮らしてみても分かったことだがTVや従来のスピーカーの声や音には見向きもしないのに、寺垣スピーカーからの声や音だと反応する。驚異的な聴力を持つ猫（可聴域は人間で約2万ヘルツまで、猫では4万ヘルツの犬より優れていて約6万ヘルツまでと驚異的、似たような音でも聞き分けることができると言われている）でも生音との区別がつかなくて困っているようである。

箱の中に入ったり、台の上に乗ったりするのが猫の習性だが、わが家のネコはどういうわけか寺垣スピーカーの上には乗ったり座ったりしない。「大事なものだから上に乗ったら駄目だよ」という飼い主の最初の教えを素直に守っているとは考えられない。寺垣スピーカーには得体の知れない何かが住んでいると信じてのんびり座ってなんかいられないと思っているのか、あるいは畏敬の念をもって眺めているのだろうか。　どうやら、寺垣スピーカーには実際の演奏や自然音に近い音の再生を可能とする秘密が隠されているに違いない。

（この捨て猫が拾われ、わが家に住みつき、家族の中で最高の地位を築くまでのいきさつや、草食動物のウサギと体重が6倍以上もある肉食動物のネコが危害を加えることなく、属性、「生まれや育ち」を越えてとても仲よく同居するきっかけとなったある事件、音楽好きなネコに育った様子、寺垣スピーカーと他の動物の反応などについては長くなるので、ここでは割愛し別の機会があればお伝えしたい。）

純正律音楽と寺垣スピーカーは名コンビ（どちらも「音の自然食」「音の自然色」）

寺垣スピーカーと自然現象の法則に則った響きの宝庫である純正律音楽とはとても相性が良い。相乗効果は抜群で、一層、透明感、爽快感のある綺麗なメロディを奏で、まさに天国から舞い降りてくるような音色を体験することができる。

ある日、寺垣スピーカーの製作責任者に純正律音楽について訊いてみた。彼はこの質問を長い間待っていたかのように純正律音楽について語り始めた。純正律音楽を知る稀な音楽家の一人であることを初めて知った瞬間である。しかも当たり前の如く、淡々と詳述する。スピーカーを作る製作者から、「楽器」を創り音を創る創作者と認識を新たにした瞬間でもあった。あらゆる楽器の音色を奏で声や音を再生する、「スピーカー」という稀有な「楽器」を創作する古来稀な人物である。

彼は、合唱歴60年余り、音楽マネジャーとして生演奏を30年間聴き続けてきた。現在も合唱の指導者であり、指揮者でもあって、音楽関係の仕事に長く従事している。指導に当たっては、子供たちが身体に染み込むハーモニーの素晴らしさを体験するまで何分でも継続して音を出させる教育をしている。やがて古稀を迎えるこの熟練創作者の音楽に捧げた年輪が彼の創作品の一つひとつに凝縮されていると言えるだろう。

話が音楽の世界に入った動機に及ぶと、堰を切ったように饒舌になった。幼いころ観た映画「ビルマの豎琴」に痛く感動したことが契機となり音楽の世界に入ったそうである。最も印象的な場面は、敵味方の撃ち合いが始まる直前に日本兵が歌った「埴生（はにゅう）の宿」のコーラスを聴いて、イギリス兵は自分たちの故郷の歌を敵軍である日本兵が歌っているのに驚き、懐かしく故郷を偲んで思わず一緒に歌い始めるシーンだ。「それが敵味方の大合唱になり撃ち合うことができなかった。音楽の持つ共通の感動が殺し合いを止めさせ、そこで人間の心を取り戻したのではないか」、そして「その感動が私を音楽の世界に飛び込ませたのだ」と強調した。

その感動を共有することにより人間的な絆が出来あがっていく。音楽の感動によって人の心が一つに溶け合っていく、世界が一つになっていくという人間の心の変化を描いた、人生を左右する強烈な映画であったようだ。その後「この物語を2-30回読み、その重なる感動が強い力となり、これまでのスピーカーにはできなかった、音楽の感動を伝えることができるスピーカーを製作し始めた」と、この世界に入りこんだ経緯を熱く語ってくれた。

仕事からスピーカーの音は生音と違うとばかり思っていて、コンサートでの生演奏しか聴くことがなかった男が、ある日寺垣スピーカーを聴いて驚嘆！寺垣スピーカーを製作しようと決意し研究を重ねながら、見事な音色の寺垣スピーカーの製作に余念がない。パネルは振動板であり、寺垣スピーカーの心臓部である。一見シンプルに見えるが実は裏には多くのリブが張り巡らされている。ヴァイオリン同様、材料、形状、加工方法、角度、配置、磨き方、ニス of 材質、塗り方、等々さまざまな要素によって音は変わってくる。製作者は誰にも真似のできない、音の世界を操る魔術師のようだ。利用する人の聴き方、聴く音楽によっても音が創られていくのが寺垣スピーカーの特長である。また、鳴らせば鳴らすほどエージング効果によって音は良くなっていく。どちらもヴァイオリンやチェロなどの弦楽器と同じ理屈である。アマティ、グアルネリ（デル・ジェス）、ストラディヴァリの名器のように、「何年ものの寺垣スピーカー」と評価される時代がいつかやって来ることも、あながち夢物語ではないだろう。

最後に彼は「寺垣スピーカーは純正律音楽とはとても相性が良く、純正律のハーモニーを綺麗に奏でる」と太鼓判を押してくれた。実際に寺垣スピーカーで純正律音楽をお聴きになれば、その音色の美しさ、輝くような透明感、身体を突き抜けるような爽快感、体中の細胞が洗われていくような気持ち良さ、どれをとってもこれ以上のもの（音）はないとご納得いただけるだろう。どんどん身体に直接届き、染み込んでいく音は快感以外の何ものでもない。まるで心のマッサージでもされているかのように癒され、疲れが抜けていく感覚を体感できるのだ。ご承知のように、純正律音楽による健康上の改善事例が体験談として多く寄せられている。「寺垣スピーカーで純正律音楽CDを聴く」、

音楽ファンにとってこんな贅沢で恵まれた日常を他に求めるのは殆ど不可能に近いだろう。

ご案内

今回純正律音楽研究会会員の皆様に寺垣スピーカーの特別価格をご用意させていただきました。(詳細は同封のフライヤーをご覧ください。)

お申し込みは純正律音楽研究会事務局を通してお願いいたします。

最初1セット購入され、気に入られて別室用、事務所用などとして数セットを追加注文される方も多くおられます。在庫がある場合には即納品できますが、ただ今注文が殺到しておりますので、納品までに1カ月程度かかる場合もございます。予めご了承方よろしくお願いいたします。

それでは、お一人でも多くの方が「寺垣サウンド」(テラ楽器サウンド)をお楽しみいただけることを心から願っております。

純正律音楽入門セミナーに参加して

岩野清子

第5回純正律音楽入門セミナーに参加しました、岩野清子です。

私は、いろいろな言葉を、勉強するのではなく聞いて真似をすることで自然に習得しようという活動をしています。(ヒッポファミリークラブといいます)

平均律と純正律のお話を伺いながら、標準語と方言(その土地の昔からの言葉)の関係と同じかな〜と、仕事から、思いました。

玉木先生が「音楽は難しくない」と何度もおっしゃるのが印象的でした。ヒッポを始めた先輩も、「言葉は教えたり勉強したりするものではない、人と人の間の関係性で創造するものだ」ということをよく言いますが、玉木先生も同じことをおっしゃっているように思いました。音楽でも言葉でも大事なものは、目の前にいる人と人が調和することですよね。なにか絶対的なものがあって、それを習得することが目的ではないですよ。絶対音感があるとか、正しい文法

を知っているとかは、そんなに重要ではないですね。

私はピアノを長く習ってきました。ピアノの音が全ての基準だと思っていました。玉木先生のお話を伺って、音楽に対する価値観が、がらっと変わりました。友達に純正律の話をしたら、彼女はジャズバンドを少しやっていた方でジャズバンドは指揮者もないし、低音のコントラバスから音を出して行って、だんだんみんなの耳で心地よい音が出るまで、スイングしながらチューニングするんだと言っていました。ピアノの音でチューニングするんじゃないんだと。

その話を聞いて、私も教育実習で高校に行き、たまたま生徒たちの合唱に関わったときのことを思い出しました。彼らはとってもいい子で、「先生、ぼくたちの歌を聴いて、直すところ言って下さい」と言うので、最後のハモリをもっと綺麗にしましょうと思い、ピアノの音で「ド」「ミ」「ソ」の音とりしてパート毎に音程を確認して歌ってもらい、最後に和音にして合わせたところ、全然美しくならなくて、腑に落ちない思いをしたんです。ピアノの音にあわせていたら、いつまでたっても美しいハーモニーにならないんだと、20年越しに合点がいったのでした。

先日、そのジャズの友達と一緒に篠笛の練習をしました。篠笛には、どこにもチューニングする構造がありません。最初私たちの出す音は半音も違いがありました。ピーピー勝手に練習しているうちに、2人の音程がぴたっとあってきたのです。どちらかに合わせようとか、正しい音程に合わせようとしたのではないのですが、人間は心地よいところに、無意識に、自然におちつくんだな〜と知った出来事でした。

このように、人間と言葉と音楽について、深く考えるきっかけとなった、玉木先生に感謝しています。



イベントレポート

5月21日土曜日

【第五回純正律音楽入門セミナー】

当日は狭い事務所に、スタッフを含め10名で、午後2時から、4時まで中身の濃いものでした。出席者の中には、寺垣スピーカーの販売会社、ABSネットワーク社長の林様ご一家4名も参加されました。



この模様は USTREAM で録画されておりますので、いつでも御覧頂けます。

<http://www.ustream.tv/recorded/12946818>

5月28日土曜日

【ハープとヴァイオリンの純正律音楽コンサート】

地下鉄丸ノ内線、茗荷谷駅近くの「ラリアル」にて、今回は久しぶりに、三宅美子さんが出演され、雨にもかかわらず、沢山の方々がお見えになりありがとうございました。

6月14日火曜日

【邦楽チャリティーコンサート】

四谷区民ホールにて、「西潟昭子先生の呼びかけによる洗足音大の仲間たち」というコンサートに玉木宏樹が応援出演しました。お箏、三味線、尺八、鼓、にヴァイオリンという、日本古来の楽器とヴァイオリンは素晴らしいコンサートでした。

6月18日土曜日

【第六回純正律音楽入門セミナー】

今年1月から開催しておりますセミナーも六回(3月は中止)になり、いづらか定着してきたような気がします。

7月30日土曜日

【第七回純正律音楽入門セミナー】 玉木宏樹の体調不良につき中止。

今後のスケジュール

2011年8月20日土曜日 14:00 から

【第八回純正律音楽入門セミナー】

場所：純正律音楽研究会 事務所近くの「フレンズ」

料金：1,000円（会員特別価格 500円）

ご予約：電話 03-3407-3726 FAX03-3797-5640

mail：puremusic0804@yahoo.co.jp

2011年9月19日月曜日(祝日)

【音楽で伝える大和の心】

場所：サントリーホール・ブルーローズ

出演：吉原佐知子(お箏)・玉木宏樹(ヴァイオリン)、他「和太鼓」梵天
「ソプラノ」中村初穂、「尺八」入江要介、「シンガーソングライター」
宙太、「ビートボックス」KAZ、「アイドル」オレンチェ、
「動物学者・動物学博士、作家」吉村卓三

料金：前売り 5,000円(当日 6,000円)

ご予約：電話 03-3407-3726 FAX03-3797-5640

mail：puremusic0804@yahoo.co.jp

2011年10月22日土曜日

【第十六回都電貸切り純正律音楽コンサート】

場所：都電、早稲田駅 午後2時発 三ノ輪橋まで

出演：吉原佐知子(お箏)・玉木宏樹(ヴァイオリン)

乗車料：¥4,500/1名様（会員特別価格¥4,000）

ご予約：電話=03-3407-3726 Eメール=puremusic0804@yahoo.co.jp

尚、到着後、三ノ輪橋駅近くの「香港楼」にて、玉木宏樹を囲んでの
懇親会をご用意しております。別途料金（3,500円）になりますが、
ご参加いただけますと幸いです。

2011年11月26日土曜日

ハープとヴァイオリンの【純正律音楽コンサート】

会場：【ラ リール】（地下鉄丸ノ内線 茗荷谷駅 徒歩 5 分）

東京都文京区大塚 3-21-14 （Phone：03-3942-2830）

日程：2011 年 11 月 26 日（土曜日） 開場；13 時 30 分 開演：14 時

出演：三宅美子（ハープ）・玉木宏樹（ヴァイオリン）

入場料： 3,500 円（会員特別価格 3,000 円）

2011 年 12 月 23 日金曜日（祝日）

【第十七回都電貸切り純正律音楽コンサート】

開催予定です。



おたより募集！

会報のご感想、ご意見、純正律音楽にまつわること等々、なんでもお寄せ下さい。たくさんのお便りを、お待ちしております。次号の【ひびきジャーナル】にてご紹介させて頂きたいと思っております。

〒106-0031

東京都港区西麻布 2-9-2 NPO 法人 純正律音楽研究会

お電話：03-3407-3726 FAX：03-3797-5640

e-mail：puremusic0804@yahoo.co.jp

<http://just-int.com/>

<http://www.archi-music.com/tamaki/>

平成 23 年 7 月 25 日

発行責任者： 玉木宏樹

編集： 相坂政夫